はしがき

関西大学英文科の有志のグループで、イギリス小説の輪読会を行おうという計画を、田中逸郎、坂本武の両君が提案したのは、1976年5月のことであった。最初のメンバーは、吉田、田中、坂本、島崎で、オースティンの『マンスフィールド・パーク』をテキストにすることに決った。これは全員の専攻からみて、ほぼ等距離にある古典作家ということでオースティンを選び、まだ翻訳の出ていない作品ということで『マンスフィールド・パーク』を選んだと記憶する。(臼田昭氏の全訳はまだ出版される前であった。)翌年谷口義朗君、更に遅れて大西昭男、多田敏男、小川静代、奥村透の諸君、最後に長谷川存古君がメンバーに参加した。作業は遅々として進まなかったが、二回の合宿を経て、漸く去年の8月に第一巻を読了した。

一方、関西大学の好意により、この共同研究の結果を、「研究成果出版補助金規程」による刊行図書として同出版部から刊行できることになったので、本年度は先ず、第一巻の分を出版することになった。この第一巻の注釈の編集の仕事に当ったのは、田中、島崎、谷口の三君である。三君は、注として採用する際の基準を定め、それに則って、輪読会に於ける討論の結論を整理・編集し、注を執筆した。極めて大きな労力を必要とする作業であったが、その仕事の中には、清書・校正に加えて、索引(第三巻末尾に

収録の予定）作製の仕事も入っている。“Introduction”の執筆は、筆者が担当した。又、挿絵の選定及び解説は坂本君の手をわずらわした。

第一巻の完成に当って、出版費用の助成を認めていただいた関西大学当局 及び 同出版委員会 に深く感謝 申し上げる。また出版の実際面においては、同出版部の内田兼俊、中川実、井内雄二の諸氏に一方ならぬお世話になったことに対して感謝申し上げる。原稿の清書を手伝っていただいた島崎知子氏にも謝意を表したい。

私たちの研究の狙いは、結局、オースティン時代の、そしてできればオースティン自身の感覚に、なるだけ近づくように努力して、原典を読むということであったと言えるであろう。その過程で、梅田倍男、菅野正彦、久田晴則三氏の第一巻第六章までの注釈（あぽろん社）及び臼田昭氏の全訳『マンスフィールド・パーク』（集英社）には、色々の貴重なご教示に与った。厚く感謝申し上げたい。私たちは、オースティンを専攻しているとは言い難く、解釈には種々の不備や誤りがあることを恐れている。先達の方々のご叱正をお願いする次第である。

なお、第二巻の注釈の編集には、多田、長谷川、小川の三君が、又、第三巻の注釈の編集には、大西、坂本、奥村の三君が当る予定である。

1981年3月

吉　田　安　雄

CONTENTS

PAGE

はしがき iii

TEXT について vii

INTRODUCTION viii

MANSFIELD PARK VOL. I. 1

NOTES 221

NOTES ON THE ILLUSTRATIONS 344

LIST OF ILLUSTRATIONS

The 'before and after' improvement · · · · **Plate 1**

The last scene of *Lovers' Vows* · · · · · · **Plate 2**

The 'scarlet coat and cocked hat' · · · · · **Plate 3**

The Grotto at Amwell · · · · · · · · · · · **Plate 4**

Barouche · · · · · · · · · · · · · · · · · **Plate 5**

ACKNOWLEDGMENTS

We are indebted to the following publishers for their courteous permission to reproduce the above illustrations: the Hamlyn Publishing Group Ltd., London, New York, Sydney, & Toronto, for Plates **1** and **3**; the Oxford University Press, Oxford, for Plate **2**; Frank Cass & Co. Ltd., London, for Plate **4**; the Yale University Press, New Haven and London, for Plate **5**. As to the sources of the illustrations, see the 'Notes on the Illustrations.'

TEXT について

現在容易に入手できる *Mansfield Park* のテクストは数種に及ぶが，本書のテクストは，R. W. Chapman 校訂の The Oxford Illustrated Jane Austen (1978), John Lucas 校訂の The Oxford English Novels (1970), Tony Tanner 校訂の Penguin 版 (1966), R. B. Johnson 校訂の Everyman's Library 版 (1955) の *Mansfield Park* を比較検討して，まとめたものである。これらのテクストに時としてみられる句読法などの問題は，読者の便宜を考慮し，適宜変更を加えた。単語そのものに関する問題点はその都度，NOTES に記しておいた。

INTRODUCTION

I　物語の置かれている年代について

Chapman は、*Mansfield Park* の第二巻第八章に、Sir Thomas が、自宅の舞踏会を12月22日木曜に決めた（p. 253 及び p. 256 参照）とあることから、これが1808年の暦に合うので、作者はきっと1808年と1809年の暦を利用したのだろうと推定して、舞踏会以後の事件の日付を細かに表示して見せている。[1] ただし彼の考は、勿論、作者は便宜上暦を利用したという程度にとどまるもので、作者が小説と史実を厳密に合わせる心算があったなどと想像しているわけではない。（例えば、第三巻 第十四章で、今年の復活祭は 例年に比べて特に遅い（p. 430）とあるのは、1809年の復活祭が４月２日であったことには合わないことも指摘している。）

一方 Avrom Fleishman は、1805—1807 年の頃に、已に西インド諸島の英領植民地の砂糖園の 不況が始まっていた（John Lucas も1813—33年の間に、Antigua 島の砂糖の輸出は 四分の一以上減じたと述べつつ、この傾向は遙か以前に始まっていたに違いないとしている[2]）ことから、Sir Thomas の Antigua 行きは、1805年を

---

1. R. W. Chapman(ed.), *Mansfield Park* (O.U.P., 3rd ed., 1934), "Appendixes: Chronology of *Mansfield Park*," pp. 554-56. 関西大学版の本テクストに於ては、今回第一巻しか編集出来ないために、本稿では Chapman 編のテクストを選んで、全体の記述をこれに拠って行ったことをお断りしておく。
2. John Lucas(ed.), *Mansfield Park* (Oxford English Novels, 1970), "Explanatory Notes," p. 437.

遙かに遡ることはない時に始まり、1807年を遙かに遅れることはない時に終ったと推定している。[3] (Sir Thomas の Antigua の砂糖園の収入が減じていることは、第一巻 第三章で Mrs. Norris の口を通して語られ (p. 30)、そのため彼は第四章で出発し、第一巻の最終章 (第十八章) で突然帰国する。)

1806年にナポレオンが大陸封鎖を強行し始めたことや、1807年に奴隷貿易禁止令が発効したことも その傍証となるであろう。[4] 前者は西インド諸島産の砂糖に対してヨーロッパの市場を閉鎖し、後者はその砂糖栽培に深刻な打撃を与えた事件であるからである。帰国直後の Sir Thomas が第二巻 第一章で、イギリスへの帰航の途中で、フランスの私掠船 ("a privateer") に襲われる不安が強かったことを語り (p. 180)、第三章で Fanny が奴隷貿易について伯父に質問する (p. 198) のも、このような推定に有利である。第六章で思いがけなく休暇をもらって帰ってきた William (彼は今海軍少尉候補生になっている) が、難破や海戦について物語る (p. 236) ことも考え合わせられる。

Fleishman は、Sir Thomas が 1805年に Antigua へ行き、1807年に帰英したという推定を含めて、Chapman の年表に先立つ事件の詳しい年表を書いて見せているが、[5] 1807年に終る Fleishman の年表と、1808年に始まる Chapman の年表の間には、1年のずれがあるように見える。恐らくは、私たちは、Fleishman の年表も、Chapman の年表も、いささかの微笑をもって好意的に読ませてもらえば足りるのであろう。大切なのは、この小説の時代背景の大筋

---

3. Avrom Fleishman, *A Reading of "Mansfield Park"* (Johns Hopkins Press, 1967), "III: *The Novel in Its Time,*" p. 37 and "Notes," p. 92.
4. *ibid.*, p. 37.
5. *ibid.*, "Notes," pp. 91–92.

を理解しておくことであろう。[6]

従って、小説の冒頭に出てくる Sir Thomas と Maria Ward 嬢との結婚についても、30年程前というのは Chapman の1808—9年の暦から逆算すれば、1778—79年の頃となるし、Fleishman の考えているように、作者が執筆を始めた1811年から逆算すれば、1781年頃ということになるが、これも1780年前後というくらいに大まかにとらえておけばよいであろう。

II Landscape Gardening と Improvement

ヨーロッパ近世の庭園には、大別して、整型式（formal style；幾何学式、建築式）と呼ばれるものと、風景式（landscape style；自然式、非整型式）と呼ばれるものとの二種があった。前者の典型的な例が、17世紀後半に、フランスで Louis XIV が建設させたヴェルサイユ宮殿の庭園に見られ、後者は、特に18世紀にイギリスで流行した庭園形式を代表としている。

Chapman は、"improvement" とは、特に、程度の差はあっても、いわゆる "picturesque"（「絵画風」）と呼ばれる美的原理に則って、邸宅や邸園を改造したり、飾り立てたりしたことを意味したと言う。しかもこの趣味は、Pope 氏の時代から、*Mansfield Park* の主要人物の一人である Henry Crawford の時代に至るまで、教養ある紳士階級が余暇を注ぎこんだ主たる娯楽であったと述べている。[1] Pope が、18世紀の前半に、ロンドンの西郊、テムズ河畔の

---

6. Tony Tanner の Penguin 版 *Mansfield Park* への "Introduction" は、その時代背景に就いての簡潔で的確な解説を含む（"Introduction," pp. 10–12）。
1. Chapman (ed.), *Mansfield Park*, "Appendixes: Improvements," p. 558.

Twickenham に求めた邸に営んだ庭園は有名である。[2] Henry Crawford は "capital improver" (*MP*, p. 244) であって、この小説の第一巻では、Rushworth の邸園改造に助言を求められて、Sotherton Court を訪れ、第二巻では、Edmund に与えられるべき Thornton Lacey の牧師館付属の庭園について、頼まれもせぬのに改造を提案する。

さて、イギリスに於ける風景式造園 ("landscape gardening") は、1750年から1783年までの間は、Lancelot Brown (1715—83) の支配的影響の下にあったと言われる。[3] しかし、造園趣味をもつ紳士たちの中には、Horace Walpole[4] のように Brown を讃美する人もあったが、一方では、Temple 伯の邸 Stowe の "kitchen gardener" 上りの彼を、歴史的知識に欠けているため、由緒ある風景を勝手に変えたとして非難するものもあった。造園の玄人の中にも、王立美術院会員で建築家である Sir William Chambers (1726—96) のように、彼の評判を妬んで、彼の庭園は、周囲のありふれた田野の景色と選ぶ所はないと言って、これを単調で平板であると

---

2. 川崎寿彦氏の『ポウプの庭』(「名古屋大学文学部研究論集」LXXVI, 1980 所載) 参照。古典文学の伝統を踏まえつつ、庭園ロマン主義とも呼ぶべき好みを見せる Pope の造園を、その詩作と関連させつつ、大きな文学史的視野の中で捉えようとするもの。氏は又自然風英国庭園の伝統が、Sir William Temple から John Evelyn, 更に Bacon の「庭園論」にまで溯り得ることを指摘している。
3. Elizabeth Wheeler Manwaring, *Italian Landscape in Eighteenth Century England* (Frank Cass & Co. Ltd., London, 1925), p. 140.
4. Gothic story の作家で、Pope と同じ Twickenham に Gothic castle まで建てた彼には、庭園論の著書もあり、小規模ながら造園も試みた。

批判するものもあった。[5] Kew Gardens の中に、中国式の pagoda を建てるなど、庭園に異国風の絵画美を求めた彼にとっては、牧草地や木立や川の流れというようなイギリスらしい田園風景を庭園の中に取入れることを狙った Brown の造園法は飽き足りなく感じられたのであろう。この Brown と Chambers の対立が、後の "Brownists" と "Picturesque School" の文書合戦に発展して行く。

Brown には "Capability" という修飾語が、綽名としてついていたが、これは彼が邸園の地形を見て、それが如何に改造の可能性を潜在させているかを見抜くのに卓抜した才能を持っていた所から来ていた。しかし感傷的な懐古趣味など持ち合わせていない彼は、その "capability" に任せて、年月を経た並木を遠慮なく切り倒す傾向もあったらしい。[6] 彼は1783年に亡くなったが、その死後 Cowper が *The Task* (1785) の中で、Brown を非難しているのも、特にこの点にあったようである。[7] Chapman によれば、William Gilpin (1724—1804) も、*Observations on the Western Parts of England, relative chiefly to Picturesque Beauty* (1798) の中で、Cowper の切り倒された並木の不当な運命を嘆くこの *The Task* の中の詩句を引用しているという。Gilpin にも Brown を咎め立てする傾向があった。[8] Cowper も Gilpin も造園家ではない。Cowper はいう

---

5. Manwaring, *Italian Landscape*, p. 148.
6. *ibid.*, p. 140.
7. *ibid.*, p. 154: 'Cowper, another foe of Brown and his works, sighs for the "fallen avenues."' Chapman は *The Task*, Book I: *The Sofa*, l. 338 のこの "Ye fallen avenues!" で始まる箇所の他に、Book III: *The Garden*, l. 766 以下でも Brown が名を挙げて批判されていることを注意している (Chapman (ed.), *MP*, p. 560)。See also Alister M. Duckworth, *The Improvement of the Estate* (Johns Hopkins Press, 1971), p. 44.
8. *Italian Landscape*, p. 155.

までもなく pre-Romantic の田園詩人であり、Gilpin は牧師で、"picturesque beauty"(「絵にすれば見栄えのしそうな美しさ」)[9] を求めて、イギリス各地を歴訪し、感想文とスケッチから成る幾冊もの著書を発表して、Gray の湖水地方への旅行を伝える手記や書簡と共に、当時の 'picturesque tour' の流行を大いに助長した人である。Cowper は Austen の大好きな詩人であり、Gilpin の 'picturesque works' には彼女は少女の頃から魅惑されて一生変ることはなかったという。Austen の 'Brownists' 観には、この二人の批判が大きく影響していると思われる。

Brown の死後には、彼の後継者で、"Monarch of Landscape" と呼ばれた Humphry (*or* Humphrey) Repton (1752—1818) が代表的造園師であった。一方、Gilpin の考え方は、Sir Uvedale Price (1747—1829) や、Richard Payne Knight (1750—1824) に引き継がれ、1794年頃から、'Brownists' (「ブラウン派」) と 'Picturesque School' (「絵画派」) との間に、お互いを非難し合う文書合戦が始まった。この頃になると、絵画派の主張は、風景画家を造園師の無条件なモデルとすべしという極端なものになっていたようである。そしてその際、手本として考えられていたのは、17世紀のイタリア風景画家たち (古典的な牧歌調の景色については Claude Lorrain、荒々しい自然については Salvator Rosa) であったとい

---

9. *Italian Landscape*, p. 168 によれば、彼は本文中に挙げた *Western Parts*, p. 238 で "picturesque beauty" を "that kind of beauty which will look well in a picture" と定義しているという。又 K. C. Phillipps によれば、それ以前に別の著書の中で、"picturesque" な対象とは、"those which please from some quality, capable of being illustrated in painting" と定義して「その自然の状態のままで目を喜ばせる」"beautiful" なものと区別している (*Jane Austen's English*, Andre Deutsch, 1970, p. 90)。

う。[10] Repton も必ずしも絵画的造園を全面的に排したわけではなかった。例えば、Claude Lorrain は、地形の許す限り、これを真似ようとする傾向をみせているが、Salvator Rosa を手本とすることには烈しい反撥を示した。又、特に邸宅の近くでは、絵画的効果が、住む人の実用（'utility'）を妨げてはいけないということを強調している。[11]

Mansfield Park の第一巻第六章で、Rushworth は友人 Smith の邸 Compton の庭園が Repton に改造してもらって見違えるようになったのに感心して、自分の邸 Sotherton Court の improvement にも Repton を雇いたいと言い、更に自分は、もう邸に余り近い老木は、二三本切り倒したが、とても眺望が開けた、だから Repton かその派の人を雇えば、見晴しをよくするために、邸の西の正面から丘の上に通ずる並木をきっと切り倒すだろう という。Fanny が、Cowper のあの "Ye fallen avenues" で始まる詩句を口ずさんで、並木を切り倒すなんて、なんと可愛想なと呟くのは、この箇所である。作者は、Chapman のいうように、この詩句に触れる Gilpin の文章をも想い出して、Fanny の口を借りて、Cowper を引き、彼や Gilpin の反 Brown の感情を、Brown の後継者である Repton への反撥に置き替え、当時流行していた「絵画派」の側からの反 Repton の心情を代弁してみせたのであろう。

'picturesque beauty' そのものに対する Austen 自身の立場は単純ではない。Gilpin の 'picturesque works' に魅惑されると同

---

10. *Italian Landscape*, pp. 156–57. Manwaring のこの著書は、Lorrain や Rosa の18世紀イギリスの詩、小説、造園などに及ぼした影響を論じた労作である。この筆者の小論も彼女の説く所を紹介する形を取っている。
11. *ibid.*, p. 159. See also Chapman (ed.), *MP*, p. 552, "Humphrey Repton's *Fragments on the Theory and Practice of Landscape Gardening*," 1816, p. 21.

時に、*Sense and Sensibility* の Marianne のような極端な絵画派の信者には、微笑しながら風刺の筆を向ける。しかし、*Mansfield Park* の中で Cowper と共に "fallen avenues" の運命を嘆く Fanny の気持には、作者は心から共鳴しているとみてよいであろう。

Austen が、Romantic Revival の時代にあって、その顔をむしろ18世紀の方に向けているように見えることは、一般に認められている通りであろう。しかし、18世紀には、そして Austen にも、このような pre-Romantic というべき要素も含まれていたことを考え合わせなければならない。総じて Austen の sense は、sentimentality はこれを揶揄するけれども、sensibility は、これを必ずしも排除するものではない。むしろ感受性とのバランスの上に立っている所に、Austen の良識の特徴があるように感じられる。

ただし *Mansfield Park* という小説の大筋から言えば、作者自身の 'improvement' 観よりも、各人物の 'improvement' に対する反応の方が大切である。Tony Tanner も自編の *Mansfield Park* に付した注の中で、'improvement' についての行き届いた解説を与えた上で、しかし作者自身の邸園改造の風習への評価如何より、その風習が小説の世界で持っている意義の方が重要であると述べて次のようにつけ加えている。極めて勝れた評釈と思われるので、少し長いけれども紹介してみたい。

> "Henry Crawford is a great and enthusiastic 'improver'—and not only of gardens. He tempts Maria with some seductive hints as to how he might improve the uninviting prospects of her life as Mrs Rushworth. He is a man who, for his own amusement, likes to tamper—with other people's estates, with other people's wives. He cannot let things rest. (Similarly Mary is in favour of 'modernizing' Edmund's vicarage at Thornton; just as she wishes to 'modernize' Edmund himself, so that he will abandon his old-fashioned

sense of duty and vocation.) Henry and Mary are all for change, for novelty, for uprooting the old and interfering with the established. In this book such instincts are shown to be potentially dangerous and destructive. Fanny, who is in her own way something of a romantic, is not however in favour of 'improvements' when they involve any excessive depredations and disruptions of the old. She is, for instance, very much against the suggested destruction of the avenue of trees, and she says: 'I should like to see Sotherton before it is cut down, to see the place as it is now, *in its old state*' (my italics). In the world of the book she is the preserver, holding out *against* the improvers."[12] (*Mansfield Park*, Penguin Books, 1966, "Notes," p. 459)

Tanner の論旨に一言敷衍するなら、Sotherton Court の 'improvement' に対する推進と反撥という反応に限って言えば、これは Henry の gentry の伝統の破壊者としての役割や、Fanny の同じくその擁護者としての役割を「象徴的に」示しているという意味に於て重要であると解釈しなければならない。何故ならば、実際の筋の展開の中では、improvement が実施されたり、取止めになったりしたために、人物たちの運命に変化を生ずるというような事件は語られてはいないからである。[13] Henry は、Rushworth 夫人となった Maria を誘惑して駈落したことで、その破壊者としての

12. See also Manwaring, *Italian Landscape*, p. 222 and Duckworth, *The Improvement of the Estate*, pp. 39–41.

13. この意味で Fleishman のように、この小説の中で、"improvement" が討論されることそのものに、gentry の政治的衰頽を予言する響きを聞きとるというのは、少し過敏ではなかろうか。彼に言わせると、Fanny が切り倒された並木の運命を嘆くのも、自然の破壊を悲しむのでなく、伝統の喪失を悼んでい

役割を実行するのであり、Fanny は、Henry の求婚を拒み、Mary に幻滅した Edmund に自分への愛を目覚めさせ、彼と結婚し、Mansfield の牧師となった彼を支えて行くことを通して、その擁護者としての役割を果すわけである。その結末に導く二つの伏線として、次に、Sotherton Court 訪問のエピソードと、private theatricals のエピソードという、第一巻に於ける二つの主要な事件を取上げてみようと思う。

Ⅲ Sotherton Court 訪問

前節で、Sotherton Court の improvement の計画は、人物たちの間に、賛成と反対の反応を生み出し、それが、彼らの gentry の伝統に対する破壊と擁護の役割を「象徴的に」示していると述べた。この改造騒ぎには、小説の筋の中で実際に果している、今一つの機能がある。改造の可能性を Henry に検討してもらうために行われた Sotherton 訪問は、本来の目的である改造案については、遂に何一つ具体的な決定をみることなく終ったが、Henry と Maria、Edmund と Mary という二組の男女に、それぞれ二人切りのデートの機会を提供する誘因となった。これが次節で取上げる private theatricals のエピソードと共に、物語の結末を導き出す伏線となっているわけである。批評家たちは当然この点に着目しているが、

るのであって、一種の保守主義の現れということになる（*A Reading of "Mansfield Park,"* pp. 31–32)。この考え方を徹底させたのが Duckworth である。彼は 'estate' を gentry の道徳的、社会的伝統の象徴とみて、これを正しく 'improve' するか否かということが、*Mansfield Park* の中心テーマと考え、そういう立場から Austen の全作品を検討して、それだけで一冊の研究書を著している。注7参照。

次に再び Tony Tanner の解釈を抄訳風に紹介してみる。[1]

「一行は Sotherton に着くと、家の中は鬱陶しく感じられたので、外に通ずる戸口へくると、'まるで一斉に自由な外気が欲しくなったように外へ出た'。この後の事件の描写を味読するためには、邸園の設計を頭に置いておくことが大切である。先づ塀に囲まれた芝生がある。これは手なずけ、整え、人工を加えた自然 (nature tamed, ordered, and civilized) である。しかしその向うには、'wilderness' がある。ここは、風物は洗練や抑制の加え方が少く、もっと暗い。. . . Mary が Edmund の牧師になろうとする意向を覆そうと努めるのは、この森の中に於てである。(会話の途中で、彼らは '大きい道' ('the great path') を離れて '極めて曲りくねったコース' ('a very serpentine course') を取る——これも行為が心理を摸している例である。) Fanny が腰を下ろして休みたいと思うのも、ここに於てであり、彼女は、森とその向うの囲いのない park を隔てている鉄門に向い合っているベンチに掛ける。これはこの小説の中でも一番重要な振舞 (gestures) の一つである。Mary は、いかにも彼女らしく、静かにしているのは大嫌いである。. . .そこで動けなくなっている Fanny を残して Edmund を唆して (entices) 森に戻る。そこへ Henry Crawford と Maria と Rushworth 氏が現れる。Maria は、束縛されたり閉じ込められたりするのには我慢できないたちなので、門から出て、外のもっと広くて自由な park (the wider freedom of the park) へ入りたがる。門——これは文明生活の慣習が課している厳しい拘束の完璧な象徴である

1. Tony Tanner (ed.), *Mansfield Park* (1966), "Introduction," pp. 25-26. (　) 内に並記した英語の中、引用符つきのものは *Mansfield Park* の原文からの引用であり、無印のものは、正確を期するため、Tanner の用語を挙げたものである。

——には鍵がかかっている。Rushworth 氏は鍵を取りに戻る。Maria の婚約者故、彼には色んな意味で'門を開く'合法的権利があるわけである（ここには多分処女性が暗示されているだろう、鍵を掛けた庭が中世の絵画で、屢々処女性を表現しているように)。しかし彼の居ない間に、Henry は Maria を相手に極めて説得力にとみ挑発的な、文字通りにも、きわどい意味にもとれる言い廻し（some very persuasive and suggestive *double entendre*）を用いる。estate の improver は又慣習的生活の撹乱者でもあるわけである。. . . この会話の中で、Maria が、鉄門が'束縛と厳しさの感じを与える'というと、Henry は、'私が手を貸せば、楽に門の端を廻って行けます、あなたがほんとにもっと自由になりたくて、それを求めることを禁じられているわけではないと考えて下されば、やれますよ'と答える箇所に特に注意して読む必要がある。彼らが結局姦通を犯す——これも社会の'鉄の'規範の迂回（bypassing）である——ことがここに予示されているからである。Fanny は危いと警告するが、Maria は忍び返しで怪我もしないで、門の横をくぐり抜けることに成功する。後になって社会慣習の忍び返しが彼女にもっと深傷を負わせることになるであろう。再び Fanny は'孤独の中に取り残される'。. . . Rushworth 氏が再び現れて置いてけぼりをくったことに気づいて取乱す。Julia が突然顔を出すが息を切らして怒っている。Edmund と Mary は森の中を'回り歩く'散歩を続ける。Fanny だけが動かず黙っていて独りぼっちである、それぞれ自分たちの欲望を追求し、その衝動を満足させている他のすべての人々の混ぐらがった道化踊り（the confused antics）に巻き込まれることもなく。. . .（改造案のためには——訳者注）何一つ建設的な結果は得られず、将来の不和の種が蒔かれた。そのわけは、garden から wood へ、更に park へと、一層勝手気儘に一層人目を免れて、

混ぐらがって、屢々こそこそと、互いに行き違いになりながら歩き廻ったこと (the confused, often furtive, criss-cross moving around in the increasing liberty and concealment of garden, wood, and park) は、人物の多くが、今後、その生活の秩序を一層深刻に乱すことの前兆をなしているからである。Fanny が元の場所にそのままとどまっていたこと (Fanny's staying put) は、他の人たちが危険にもさまよい歩いているのに、彼女は粘り強く道義を守り抜くことを表わすささやかな姿勢 (a small gesture of moral tenacity) なのである。」[2]

最後に前節の結びと同様に、一言 Tanner の論旨を敷衍する。上に紹介した Tanner の説の終りに使われている "moral tenacity" の 'tenacity' を積極的な抵抗の粘り強さという意味に解してはいけない。むしろ孤立の中の忍従というような色合を添えて読むべきである。Fanny がベンチに腰を掛けたままであったのは、元来は、身体が弱くて疲れ切ってしまったからである。森の中へ去っていった Edmund と Mary のことが、Edmund を秘かに恋し始めていた Fanny には気がかりになっても、Edmund に体力の理由でとめられているので、後を追うわけにもゆかない。Henry と Maria

---

2. Judith O'Neill 編 *Critics on Jane Austen* (George Allen and Unwin, 1970) の中に入っている Thomas R. Edwards, Jr., "The Difficult Beauty of *Mansfield Park*" (1965), pp. 91–93 も参照。議論の運び方は Tanner の方がより巧妙だが、Edwards の論文の発表の方が一年先であるとすれば、その "a dance-like movement through the landscape of lawn, Wilderness, and park" というような発想は Tanner に示唆を与えているかも分らない。Edwards の 'Difficult Beauty' という表題は、この小説が Austen の他の作品に比べて主題をより微妙に叙述し展開させているが、それは主題の提示し方に、新に寛容さと真摯さが加わったことを意味するという論旨からきている。

の行為は怪しからぬことだと思うが、精々、鉄門の忍び返しで怪我しますよと警告して、Maria に一笑に付されるだけである。Tanner は Fanny の特徴を 'quietness' ("Introduction," p. 22.「慎み深さ」という程の意味か) と考え、John Lucas は 'passivity' (「受身の姿勢」)[3] と呼んでいるが、少くともこの段階までは——つまり Fanny が Henry の求婚を、Sir Thomas の不興を買っても、拒み通すまでは—— Fanny の 'tenacity' は quiet で passive なものであったと解釈される。

今一つ、wilderness について、念のため、一言説明を加えておきたい。これは O. E. D. の定義によれば、「紳士の邸園の一部に植林して森をつくり、装飾的な、又は奇想を凝らした (in an ornamental or fantastic style) 樹木の配置を試み、屢々迷路をなすようにこさえたもの」とあって、古くは17世紀の Dryden から、近くは Cowper の *The Task* からの引用を挙げている。つまりかなり技巧的なもので、私たちは、普通の荒野という意味はいうまでもなく、自然のままの密林のようなものも、連想してはいけない。これは自然風庭園趣味が生み出した造園家の一つの工夫であり、又特殊な呼び名であろう。小説の中でも、この 'sweet wood' (p. 94) は、余りに整然と設計されている ('laid out with too much regularity') が、(芝生の) 球ころがしの球戯場やテラスに比べると、暗い木蔭や自然美の世界をなしていて彼らは、その 'refreshment' を楽しんだというように描写されている。この 'refreshment' は、木蔭が強い日射を遮っていることに言及したものであろう。私たちは、Tanner の用いている 'darker' という形容に読み込み過ぎをしてはいないであろう。

---

3. John Lucas (ed.), *Mansfield Park* (Oxford English Novels, 1970), "Introduction," p. viii.

Tanner は上に引いたように 'the increasing liberty and concealment of garden, wood, ank park' というように、邸園の三分野の違いを簡潔に要約してみせている。芝生が一番人の目を遮るものがなく、はしたない振舞いをしにくい場所であることはいうまでもないが、森と外苑 (park) を比べてみても、整然と植林した森より、一目では見通せない程に広く、起伏にも富む外苑の方が、人目につきにくく、それだけ気儘に振舞えるということであろう。[4] そして Tanner は、Edmund と Mary は wood を、Henry と Maria は park を歩き廻ったという。彼は作者が、この二組の男女に、それぞれその行為のはしたなさの程度に応じて、自由に振舞える可能性を異にする区域を割当てていると解釈して、そこに作者の象徴的意図を読み取ろうとしているのであろうか。その行為と背景の組み合わせの図式化は真に綺麗である。しかしその割り切れ過ぎている所に一抹の不安を感ずる。何故なら Edmund と Mary が最後まで森の中を歩き廻ったとするのは、Tanner のペンのスリップで、実は彼らも Fanny を残して立去った後直ぐ、横木戸から park に入り、例の並木の下で楽しい語らいをしてきたのであった (p. 103)。筆者自身にも、Tanner の余りに巧みにできている図式化につられて、彼と同じような解釈をしてみたい誘惑に駆られる虞れが感じられるので、敢えて付言した次第である。

---

4. 実際、park に姿を消した Henry と Maria の後を追うべく、先づ Julia が、次いで Rushworth も park に入って行くが、彼ら自身の報告でも、お互いに相手の後を追っかけ廻していたようなもので、やっとめぐり会えた時には、Fanny の観察では、時すでに遅く仲直りはできなかったらしく、何か改造案を決定するには、明白に間に合わなかったとある (p. 104)。

IV Private Theatricals のエピソード

Sotherton Court 訪問が行われたのは八月の暑い一日のことであった。そして九月から、十月の多分末に Sir Thomas が思いがけなく早く帰国するまでの間、小説の中で13章から18章までにわたって、家長の留守をいいことに、Mansfield Park の邸は素人芝居上演のための下稽古や舞台や衣裳つくりの騒ぎに明け暮れることになる。これが、小説の結末を導く第二の、そしてより重要な伏線をなすエピソードである。この芝居の外題は、*Lovers' Vows*（「恋人同志の誓」）というのであるが、この芝居及びその上演のエピソードについては、John Lucas の解説が勝れているように思われる。次にそれを抄訳して紹介する。

「Kotzebue[1] の *Das Kind der Liebe*（「私生児」）は1791年にドイツで出版され、その後数年の間に、いくつかの英訳の飜案物が現れた。その中一番人気のあったのが、Inchbald 夫人[2] が自由訳をした *Lovers' Vows* で、1798年の初版以来、屢々増刷され上演された。Jane Austen が Bath の町に在住していた期間（1801—5）だけで、そこの Theatre Royal で、この劇は実に六回も上場されている。それ故、彼女は、十中八九、この劇の興行を見

1. Kotzebue [kɔ́tsəbu], August von (1761–1819), a German dramatist, author of a large number of sentimental plays which had considerable vogue in their day and influenced the English stage.
2. Inchbald, Mrs. Elizabeth (1753–1821), *née* Simpson, was a novelist, dramatist, and actress. She is chiefly remembered for her two prose romances 'A Simple Story' (1791) and 'Nature and Art' (1796). 注の1、2共に *The Concise Oxford Dictionary of English Literature* による。

たであろうし、彼女が *Mansfield Park* の中で頭に浮べていたのは、Inchbald 夫人の飜案劇に間違いない、何しろこの小説の中で、ただ一箇所直接引用されているのは Inchbald 夫人の脚本からであり、[3] Cassel 伯は、その飜案では42も台詞があって、Rushworth 氏を大喜びさせているのであるから。

Lovers' Vows の粗筋は次の通りである。主人公の Frederick は、彼の母 Agatha Friburg が、かつて Wildenhaim 男爵の愛人であったこと、彼こそは男爵の私生児当人であることを発見する。Frederick は男爵を説得して、自分を認知させ、母と結婚させるが、その企みの遂行に、男爵の娘 Amelia の家庭教師である若い牧師 Anhalt の助力を受ける。男爵は、娘を愚鈍な Cassel 伯と結婚させたいと望むが、彼女は、恋人 Anhalt との結婚を許すように父を説得する。

. . .我々の見地からすれば、この劇の人物の役柄の方が、事件や筋より大切である。そのわけは、Jane Austen がこの劇を選んだのは、*Mansfield Park* の登場人物たちの内包する重要な要素を浮彫りにするためであったことは疑いないから。

配役のリストを並べて見れば、このことがはっきり分る。

Baron Wildenhaim	Mr. Yates
Count Cassel	Mr. Rushworth
Anhalt	Edmund Bertram
Frederick	Henry Crawford
Butler Landlord Cottager	Tom Bertram

3. See Chapman (ed.), *Mansfield Park*, p. 358. *Lovers' Vows*, Act III, Scene ii から 'When two sympathetic hearts meet in the marriage state, matrimony may be called a happy life.' という Anhalt の台詞の引用が Mary によってなされる。

Agatha . . . . . Maria Bertram
Amelia . . . . . Mary Crawford
Cottager's Wife . . . . . Mrs. Grant

これは又思い切った 'type-casting' (俳優のタイプを元にした配役) である。Cassel 伯は、Rushworth 氏の愚かさを実例で示して余す所なく、伯爵が Amelia を失うことは、Rushworth 氏が Maria を失うことを予め示すものであり、Agatha の前歴は、Maria が Henry Crawford に誘惑されて過ちを犯すことを予め示す。同様に、Wildenhaim 男爵の過去の不行跡は、Yates 氏が Julia と駈け落ちすることの前触れであり、彼が結局後悔して Agatha と結婚することは、Yates が Sir Thomas の次女 (つまり Julia——訳者注) と結婚することの前兆である。もっと大切なことには、Mary Crawford が進んで Amelia 役を選ぶことは、Jane Austen の Mary に対する厳しい格づけに関して、私たちに疑の余地なからしめている。*Lovers' Vows* の序文の中で、Inchbald 夫人は、「原作で、Amelia がその恋人に対して愛情を表白する際の、はしたない、明らさまな言い廻し ('the forward and unequivocal manner') は、イギリスの観客には、聞くに耐えず」、Amelia の愛は、「いかがわしい程に露骨 ('indelicately blunt') である」と感じられたであろうが故に、自分はかなり苦労して原作者の Amelia の表現し方に変更を加えたと主張している。[4] だが Amelia のはしたなさは、それにも拘らず残って居り、Mary の Edmund に対する態度と真によい勝負である。そして Edmund が Anhalt 役を演ずるのに抵抗を感ず

4. この "Preface" からの引用については、Lucas は *Lovers' Vows*, 5th edn. (1798), p. iv を参照させている。私たちは Chapman 編 *Mansfield Park* に全文収録してある、その第五版の脚本の "Preface," p. 478 でこの箇所を読むことができる。

ることの中に、私たちは Mary Crawford が自分の妻としてふさわしいか否かについて彼が迷っている気持を認めることができる。」[5]

Lovers' Vows の筋の背景説明を少し追加する。Agatha は、ドイツのある村で生れたが、今から20年前、その近くの男爵の母の住む城で小間使をしていて男爵に 'seduce' された。彼女は男爵との約束を守って、相手の名前を明かさなかったため、城から追放され、親にも勘当され、町に出て生れてきた子を抱えて苦労する。息子の Frederick は成人して今から5年前に親許を離れて兵士になった。彼は軍隊を辞め徒弟となって職を身につけようと望むが、出生証明を持ち合わせていないことがその支障となるので、証明書を取りに生れ故郷の村の近くまでやってくる。その街道で旅籠を追い出されて貧乏と病気に苦しんでいる母とめぐり合い、自分が私生児であることを聞かされる。男爵は Agatha を棄てて貴族の娘と結婚し、Alsace の妻の実家で暮していたが、その夫人も亡くなり、それから一年後、今から一月余り前に娘をつれて、母の死後召使だけが住んでいた村の城へ戻ってきている。以上である。

例によって Lucas の論旨を敷衍してみる。彼が言いたいのは Austen の 'type-casting' の辛辣さということである。劇の筋と小説の筋がパラレルであるということではない。例えば、後で Julia と駈落ちをすることになる Yates に、Agatha を seduce した男爵を演じさせている所に作者の皮肉な目を感ずるというのである。しかし、いうまでもなく、Yates の駈落ちの相手は、妹娘の Julia であって、Agatha を演じている姉の Maria の方ではない。Lucas

---

5. John Lucas (ed.), *Mansfield Park* (Oxford English Novels, 1970), "Appendix: Lovers' Vows," pp. 433–34. See also Chapman, p. 474, "Note," and Tony Tanner (ed.), *Mansfield Park*, "Notes," pp. 460–61.

が「予示」とか「前兆」とかいう言葉を使っているのは、男爵の seduction と、Yates の elopement という不行跡の性格一般に関してであって、その行為の相手という具体的な内容まで頭に入れて論じているわけではない。

次に、Maria が演ずる Agatha と、Henry の演ずる Frederick は、恋人同志ではなく、親子であるということを思い出さなければならない。[6] 所が第一幕で母と息子が再会する場面では、Agatha の仕草では "[*Rising and embracing him.*]" (Chapman, p. 483) とか、"[*presses him to her breast.*]" (p. 489) とかいうト書きがあり、Frederick のそれについては、"[. . . *takes her hand, and puts it to his heart.*]" (p. 487) とか、"[*He embraces her.*]" (p. 488) とかいうト書きがある。[7] Lucas が、"Maria and Henry play at being in love"[8] と書き、Tanner が、Maria は「"演技" を隠れ蓑にして、大喜びで Henry に対する不義の愛情を満足させている」[9] と書き、Fleishman が、この二人の組合わせは、"an opportunity for flirtation" となっている[10] と書いているのは、す

---

6. Cf. A. Fleishman, *A Reading of "Mansfield Park,"* p. 26: ". . . (curiously, their roles are those of mother and son). . ."
7. 二人が下稽古をしながら、演技として抱き合う真似をするだけにとどめるべき所で、本当に抱き合ってしまうのを抑えるのに苦労している ("trying *not* to embrace," p. 169) のを Mary が見つけるのも、本稽古の最中に、突然の父の帰還を伝えに入ってきた Julia が、Henry が "pressing her (*i. e.* Maria's) hand to his heart" (p. 175) しているのを見つけて嫉妬に烈しく心を傷けられるのも、この一幕の仕草を指している。
8. J. Lucas (ed.), *Mansfield Park,* "Introduction," p. xiv.
9. Tanner (ed.), *Mansfield Park,* "Introduction," p. 28. See also *ibid.*, p. 29.
10. Fleishman, *op. cit.*, pp. 25–26.

べて、このような劇の仕立てに言及したものであろう。Austen の 'type-casting' も、なかなか芸が細かいと言わねばならぬ。

最後に、この素人芝居騒ぎの間の Fanny の立場について触れる。最初反対していた Edmund は、Mary の演ずる Amelia の恋人 Anhalt の役が、よそから若い男を頼んできて穴埋めをされそうになると、嫉妬心に負けて変節して、その役を自分が引き受ける。最後まで参加するのを拒み通すのは Fanny だけである。(Julia は Agatha 役を姉に取られたのに拗ねて、この計画に対してそっぽを向いているだけである。) Fanny の反対の理由は、勿論、第一には、脚本の内容のいかがわしさ (Agatha が私生児を生むこと、Amelia の愛情表現のはしたなさ) からきている(p. 137)。Edmund が最初に指摘した通り、伯父の留守中に、伯父の反対するに決っている計画を押し進めることが、家長に対する服従の義務に違反するという理由もこれに加わる (p. 153, p. 187)。第二に彼女は余りに内気で、とても芝居に出ることなどはできないという内情がある (p. 145)。そのことについて、彼女は後で、自分が反対するのは、人前に自分の姿をさらすのが恐いせいではなかろうかと、自分の動機の純粋さを疑ってみたりしている (p. 153)。Lucas は内気という普通の見方から一歩掘り下げて、Fanny は、自分の性格そのままの行動しかできない人だから、演技は体質的に不可能という興味深い解釈をしている。[11] 第三に、これが実は一番強い心理的反撥の理由となっていたかも知れないが、配役に心を痛めていたということがある。Henry と Maria の組合わせについては、Maria の婚約者 Rushworth の気持を忖度して、更に、Edmund と Mary の

---

11. Lucas (ed.), *Mansfield Park,* "Introduction," pp. xiii–xiv. Tanner が、自編の *Mansfield Park* への序文の中で、Fanny を "the most determined non-actor" と呼んでいる (p. 30) ことが、Lucas にヒントを与えているか。

組合わせについては、自分の Edmund に対する秘めたる愛情の故に。この最後の点に関連して、Lucas は又、いつも味方になってくれていた Edmund までが心変りして、芝居に参加し、おまけに、第三幕の自分と Mary の love-scene の稽古を Fanny に傍で聞いていて、批評してくれることを求めるという鈍感な振舞にまで出ることを取上げて、Fanny の「孤立」("isolation") というテーマを強調している。[12] しかも Fanny が、その人のよさにつけこまれて、自分では反対しているこの芝居の下稽古に、見物人の役や、後見役として立合いをさせられるのは、この Edmund と Mary の場合だけではないのである。孤立の中の忍従という言葉が再び私たちの心に浮んでくる。このことを考えると、Fanny の gentry の道義という伝統を破壊しようとする力への抵抗は、この private theatricals の段階でも、Sotherton Court 訪問中のエピソードの場合と同様にまだ passive であったと考えなければならない。夫の仮病（？）で来れなくなった Grant 夫人の代役を押しつけられて、Cottager's Wife を演ぜざるを得なくなりそうな羽目に陥った時に、それを免れることができたのも、彼女自身の抵抗の力によってではなく、Sir Thomas の突然の帰国のお蔭であった。それは芝居そのものが、この権威ある家長が姿を見せただけで、即座に中止となったためであった。

---

12. *ibid.*, "Introduction," p. x, and p. xiii.